

京都大学図書館機構講演会

2006.10.10

目録 / 目録規則の 動向と将来像

渡邊 隆弘

(帝塚山学院大学)

watanabe@hcs.tezuka-gu.ac.jp

★目録規則の10年

◆ 既存規則の手直し

- 1997 ISBD(ER) *電子資料
- 2001 NCR87改訂2版 (電子資料)
- 2002 ISBD(CR) *継続資料
AACR2改訂版(電子資料、継続資料、地図資料等)
- 2006 NCR87改訂3版(継続資料、和古書漢籍)

◆ 新しい枠組みへ

- 1997 FRBR(「書誌レコードの機能要件」)
- 2002- AACR全面改訂作業(RDA)
- 2003- IFLA「国際目録原則」
- 2006 ISBD統合版(案)

★ なぜ見直しが必要か？

◆ 対象資料の変化 (= 電子化)

「可塑性」の高い資料

「資料区分」が流動化

物理的側面(キャリア)と内容的側面(コンテンツ)

◆ 情報組織化環境の変化 (= 電子化)

OPACと目録規則の乖離

「標目」概念の見直し

他の世界との「相互運用性」

その他、コスト低減圧力など

Ref. 渡邊、河手、吉田「最近における目録規則の改訂
動向とその問題点 電子資料と継続資料を中心に」
『図書館界』56(2), 2004.7. p.102-110

★ 目録の将来を問う - 危機意識

◆ カリフォルニア大学

*Rethinking How We Provide Bibliographic Services
for University of California* (Dec., 2005)

◆ インディアナ大学

*A White Paper of the Future of Cataloging at Indiana
University* (Jan., 2006)

◆ LC (議会図書館)

*The Changing Nature of the Catalog and its Integration
with Other Discovery Tools* (Mar., 2006)

 注目と論争

- ◆ ML NGC4LIB “Next Generation Catalogs for Libraries”
June 2006- <http://dewey.library.nd.edu/mailling-lists/ngc4lib/>

目次

0 . はじめに

1 . 目録の将来像

1 . 1 . 目録への危機認識と模索

1 . 2 . 目録「再生」へ向けて - いくつかの論点

2 . 目録規則の将来

2 . 1 . FRBR - モデリングから実用へ

2 . 2 . 新しい国際目録原則

2 . 3 . AACRからRDAへ

3 . おわりに

★ 目録をめぐる現状認識

Deanna Marcum 「目録業務の将来」

2005年1月の講演

(Associate Librarian for Library Services, LC)

- ◆ LCの目録への投資 4,400万ドル/年
- ◆ 「Google時代」の危機
 - 目録利用の低下
 - 学生がどれだけ図書館で探すか？
 - 大規模デジタル化プロジェクト
 - Google, Microsoft等と大図書館の提携
 - 図書館界単独では考えられない規模
- ◆ 抜本的な問い直し
 - コストを正当化できるか？
 - 本当に必要な機能は何か？

Ref. Marcum “The Future of Cataloging” *Library Resources & Technical Services*, 50(1), 2006. pp.5-9

★ 各機関からレポート

◆ カリフォルニア大学

Rethinking How We Provide Bibliographic Services for University of California (Dec., 2005)

<http://libraries.universityofcalifornia.edu/sopag/BSTF/Final.pdf>

◆ インディアナ大学

A White Paper of the Future of Cataloging at Indiana University (Jan., 2006)

http://www.iub.edu/~libtserv/pub/Future_of_Cataloging_White_Paper.pdf

◆ LC (考察対象は「研究図書館の目録」)

The Changing Nature of the Catalog and its Integration with Other Discovery Tools (Mar., 2006)

<http://www.loc.gov/catdir/calhoun-report-final.pdf>

- ◆ 基本的に、Marcumと同様の危機意識から
目録のコスト削減方策
目録の機能改善

* 危機認識の程度や力点には差があるが...

★ LCの「Calhounレポート」(Mar., 2006)

- ◆ コーネル大図書館のKaren CalhounがLCからの委託により執筆
*The Changing Nature of the Catalog and its Integration with Other
Discovery Tools*

<http://www.loc.gov/today/pr/2006/06-093.html>

- ◆ 文献調査と館界インタビューを元に、
研究図書館目録「再生」のための「青写真」を提言

悲観度の高い認識

ビジネスモデル(企業経営理論)の適用

コスト削減方策への傾斜

LC目録政策への連想

*シリーズ典拠の作成中止(2006)



注目と論争

Thomas Mann (LC) の強い批判

“Critical Review”

<http://guild2910.org/AFSCMECalhounReviewREV.pdf>

★ Calhoun と Mann の論争点

目録利用度は減少し、もはや衰退期に入った製品 (Calhoun)

← 一般にはともかく、「研究者」に限れば当たらない (Mann)

ビジネス理論に照らせば、衰退産業の維持・再生には何らかの縮小やコストダウンは避けられない

← 図書館にビジネスモデルを適用するのがおかしいし、無理に適用しても機能しない

目録の改善 (ランキング機能など)

← Googleライクの単純化は問題。

普通の情報探索者と「研究者」の違いを認識せよ

目録作業に求められるのは完璧な品質より速さ

← 体系的な検索ができる品質がなくては意味がない

LCSH (件名) の維持はあきらめてキーワード主体で

← 網羅的・体系的な検索には語彙統制しかない

* キーワード「研究者」に留意の要

目次

0 . はじめに

1 . 目録の将来像

1 . 1 . 目録への危機認識と模索

1 . 2 . 目録「再生」へ向けて - いくつかの論点

2 . 目録規則の将来

2 . 1 . FRBR - モデリングから実用へ

2 . 2 . 新しい国際目録原則

2 . 3 . AACRからRDAへ

3 . おわりに

★ 各機関レポートに見る、いくつかの問題

◆ なぜ目録は利用者に評価されないか

使いにくいから

使い方が複雑、データが複雑、
目指すものがすぐ出てこない...

情報が貧弱だから

内容情報がない、画像もない、レビューもない...

情報が少ないから

雑誌論文が検索できない、Webのほうが情報豊富...

◆ 目録のコストは下げられないのか もっと簡略なデータにしたらどうか 書誌データ流通を改善できないか

★ 進化しない目録の機能

「25年以上にわたる多くの研究・論文にもかかわらず、利用者の目録検索の成功を改善する多くのオリジナルアイデアは、いまだ実装されていない。皮肉なことに、これらの技術の多くは、現在のWebサーチエンジンに見いだせる」

「この10年間に、オンライン検索はどこでも、より単純で効果的なものになった。図書館目録を除いては」

◆ 古くからの要求をまず...

ランキングアウトプット

失敗検索の支援(スペルチェックなど)

ヒット箇所のハイライト表示...

◆ ブラウジング機能の強化

同一著作・系統のクラスタリング(FRBR)

主題等のファセットクラスタリング

分類・件名表の利用

★ ブラウジング機能強化の例

◆ RLG “RedLightGreen”

一覧表示を「著作」ごとにまとめて表示
クリックによって諸版を表示
ヒット箇所のハイライト表示...

<http://www.redlightgreen.com> *OCLCとの統合のため、2006.11終了

◆ North Carolina State University

一覧表示とともに”Narrow Result by: “
トピック、ジャンル、フォーマット、地理、時代、著者
その他にもランキングアウトプット等の機能

<http://www.lib.ncsu.edu/catalog/> *Endeca社のシステム

★ 書誌情報 +

お手本はやはりAmazon？

- ◆ 目次情報、内容紹介、著者紹介、表紙イメージ...
実は、日本の公共図書館では普及しつつある
検索のブラックボックス化も...
- ◆ 利用者による情報
レビュー
カテゴリー、キーワード... (folksonomy)

★ よりオープンな目録へ

学術情報世界の中での目録の位置
対象外のコンテンツが増え続ける
そのままでは弱まるばかり

- ◆ 図書館蔵書以外のデータも取り込み
選定されたネットワーク情報資源など
- ◆ 他のデータベースとのリンクング、メタサーチ
論文A&I、機関リポジトリ...
フルテキストへの確実なリンク
- ◆ 利用者のいるところへ「出張」
学内の教育システムやポータルに検索窓
メタデータ自体を外部サーチエンジンに提供
(自前でWeb世界との統合をはかるよりは実効性)

★ 目録 / OPACの「モジュール化」

- ◆ ILS (Integrated Library System) からの自律
開発・改良の柔軟性
- ◆ Webサービス等の標準的な入出力による動作
よりオープンなシステムへの前提

* 日本でもどこかでやる必要があるのでは

★ より簡略な目録の可能性

◆ メタデータの必要性

一次情報デジタル化が進んでも否定は考えにくい

◆ 書誌記述簡略化の可能性

一次情報デジタル化環境での「識別」機能
「アクセスレベルレコード」の試み(LC)
慎重な検討が必要

◆ 典拠管理と主題アクセス

主題典拠(LCSH)には様々な意見のあるところ
名前典拠の重要性ではほぼ一致

フルテキストインデクシングで代替できない部分

★ 書誌データ流通と分担目録

- ◆ ローカル目録データ維持コストの低減を
書誌ユーティリティからコピーしたら修正しない
可能な限り外部利用・再利用を

...

* 研究図書館の多くは、カスタマイズしたデータをローカルに維持し、自主性を保ってきた

目次

0 . はじめに

1 . 目録の将来像

1 . 1 . 目録への危機認識と模索

1 . 2 . 目録「再生」へ向けて - いくつかの論点

2 . 目録規則の将来

2 . 1 . FRBR - モデリングから実用へ

2 . 2 . 新しい国際目録原則

2 . 3 . AACRからRDAへ

3 . おわりに

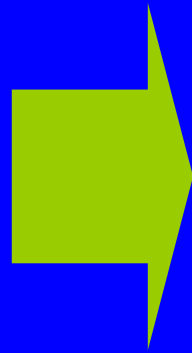
★現在の目録の枠組み

「パリ原則」 1961

目録の機能・構成、標目の選択と形式

ISBDs 1969 ~

書誌記述(意味定義、構文定義)



AACR1 (1967)

AACR2 (1978) ... 2002 rev. ed.

NCR1965

NCR1977

NCR1987

... 改訂3版(2006)

★目録規則の10年(1)

◆ 既存規則の手直し

- 1997 ISBD(ER) *電子資料
- 2001 NCR87改訂2版 (電子資料)
- 2002 ISBD(CR) *継続資料
AACR2改訂版(電子資料、継続資料、地図資料等)
- 2006 NCR87改訂3版(継続資料、和古書漢籍)

- ◆ 「電子資料」への対応が主テーマ
可塑性が高く、不安定な情報
キャリア(物理媒体)の不安定性
コンテンツ(内容)の不安定性

★目録規則の10年(2)

◆ 新しい枠組みへ

1997 FRBR(「書誌レコードの機能要件」)

2002- AACR全面改訂作業(RDA)

2003- IFLA「国際目録原則」

2006 ISBD統合版(案)

◆ 現在まさに進行中

完成のめどは不確定

内容面でも議論が激しく、最終形の見通しはまだみえない

★ なぜ見直しが必要か？

◆ 対象資料の変化 (= 電子化)

「可塑性」の高い資料

「資料区分」が流動化

物理的側面(キャリア)と内容的側面(コンテンツ)

◆ 情報組織化環境の変化 (= 電子化)

OPACと目録規則の乖離

「標目」概念の見直し

他の世界との「相互運用性」

その他、コスト低減圧力など

Ref. 渡邊、河手、吉田「最近における目録規則の改訂
動向とその問題点 電子資料と継続資料を中心に」
『図書館界』56(2), 2004.7. p.102-110

目次

0 . はじめに

1 . 目録の将来像

1 . 1 . 目録への危機認識と模索

1 . 2 . 目録「再生」へ向けて - いくつかの論点

2 . 目録規則の将来

2 . 1 . FRBR - モデリングから実用へ

2 . 2 . 新しい国際目録原則

2 . 3 . AACRからRDAへ

3 . おわりに

★ FRBR

Functional Requirement for Bibliographic Record 「書誌レコードの機能要件」(IFLA, 1997)

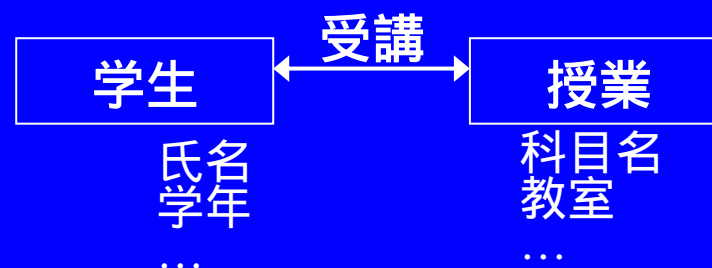
◆ 書誌レコードの構造分析

「実体関連モデル(E - Rモデル)」を使用

実体 (Entity)

属性 (Attribute)

関連 (Relationship)



◆ 概念モデル(規則ではない)

目録世界に大きな影響力

FRBRize FRBRization ...

諸規則改訂

★ Functional Requirement for Bibliographic Record

◆ 特徴1)

目録利用の「ユーザタスク」(利用者指向の分析)

「発見(Find)」

「同定(Identify)」

「選択(Select)」

「入手(Obtain)」

書誌レコードの各要素は何のための「属性」か？

◆ 特徴2)

資料を4段階の枠組み(抽象 具体)で把握

「著作(Work)」

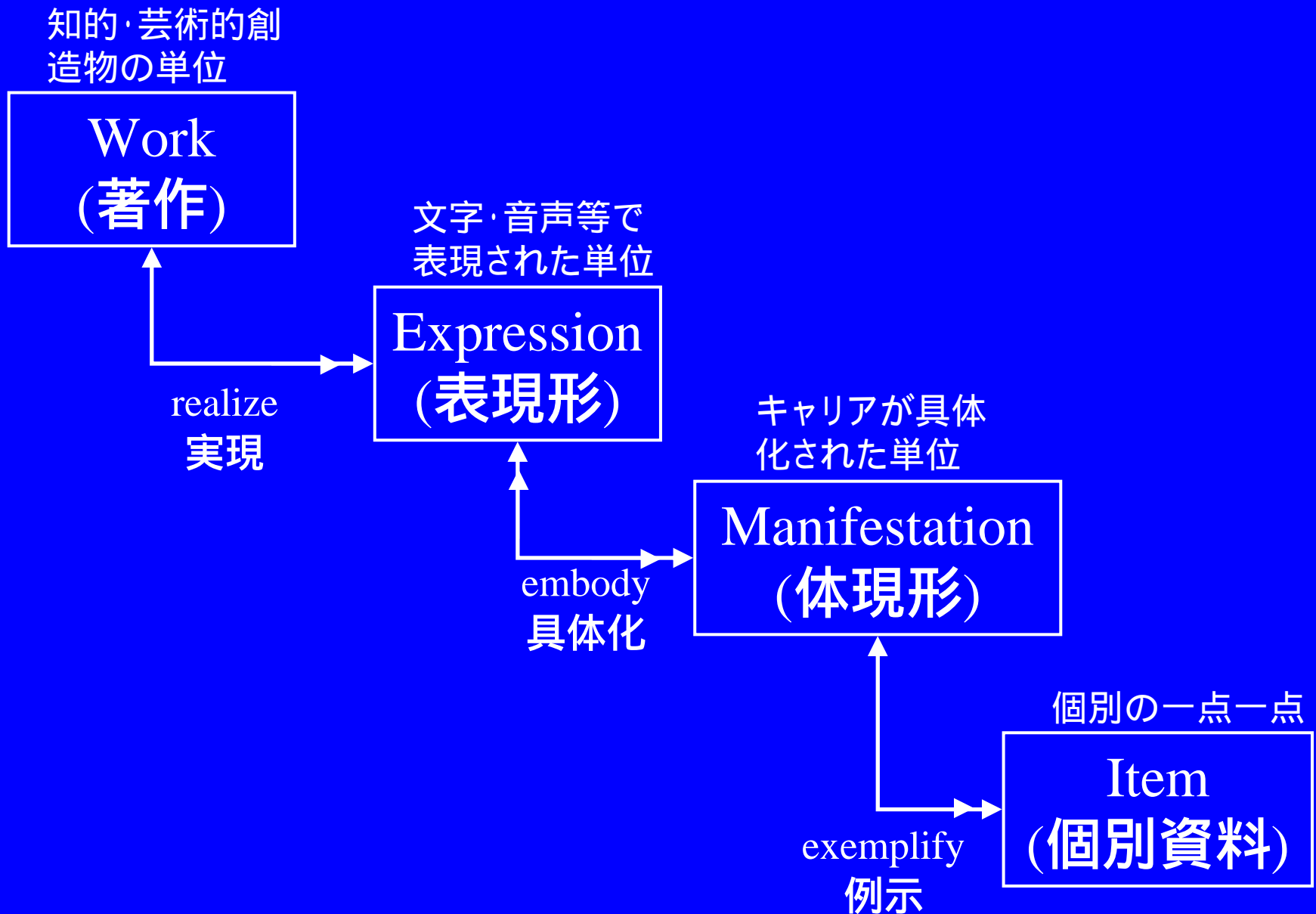
「表現形(Expression)」

「体現形(Manifestation)」

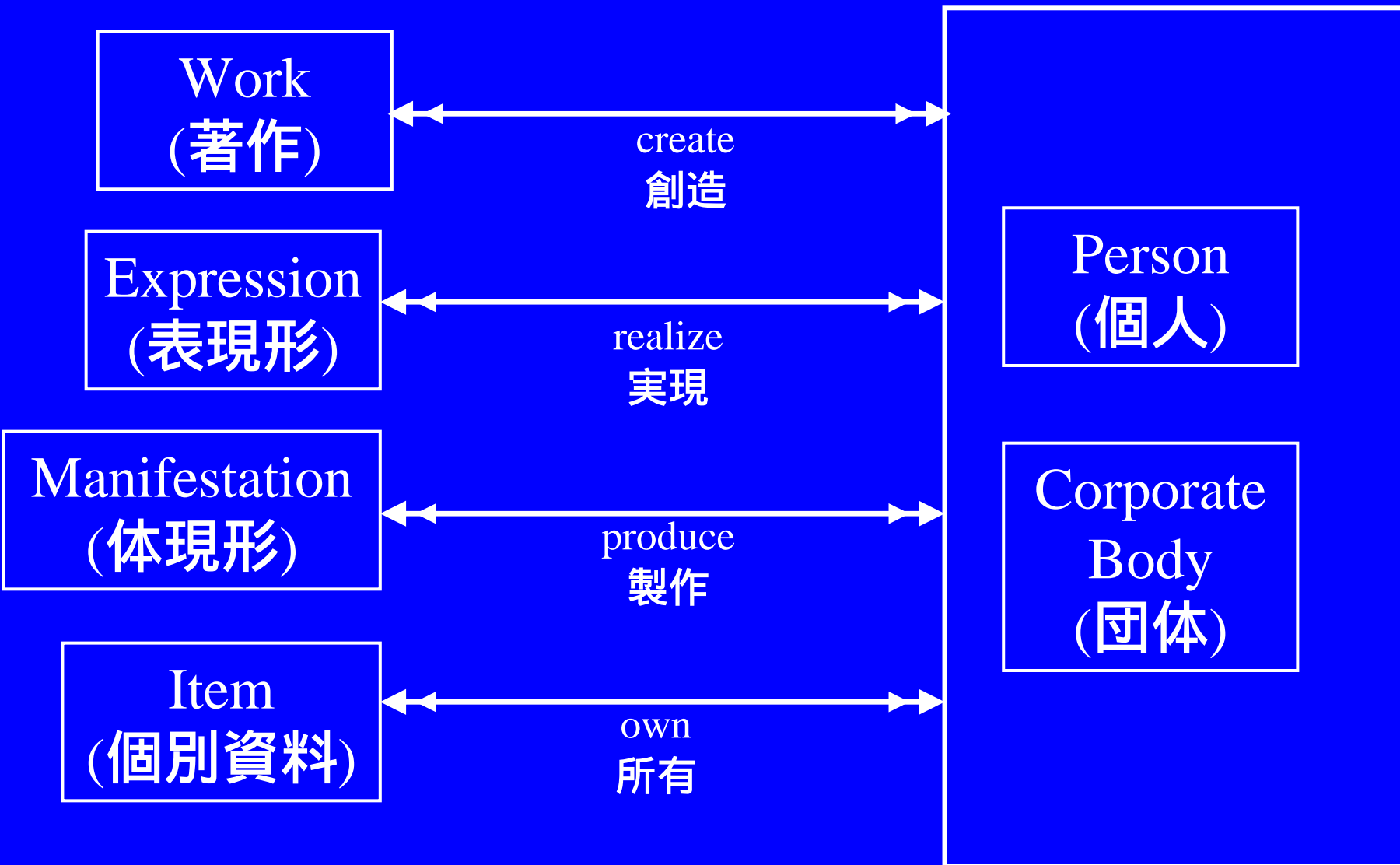
「個別資料(Item)」

書誌レコードの各要素はどの「属性」か？

★グループ1の実体 (= 書誌データに対応)



★グループ2の実体 (= 名前典拠データに対応)



★グループ3の実体
(= 主題典拠
データに対応)

Work
(著作)



Concept
(概念)

Object
(物)

Event
(出来事)

Place
(場所)

Work
(著作)

Expression
(表現形)

Manifestation
(体现形)

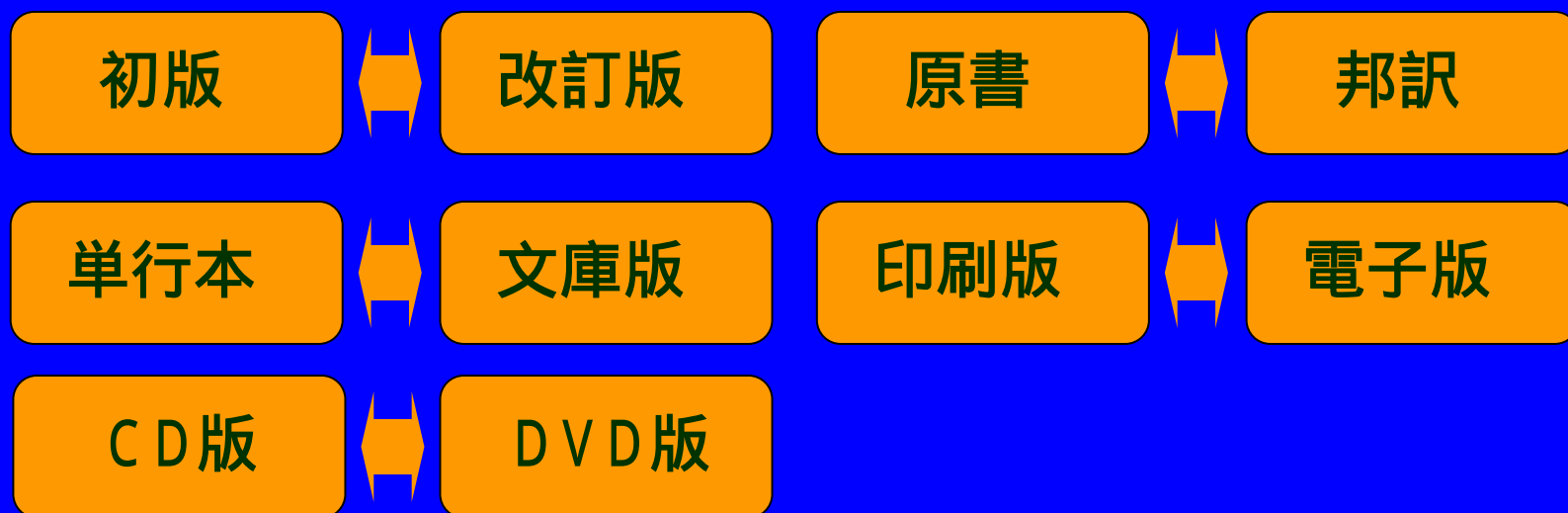
Item
(個別資料)

Person
(個人)

Corporate
Body
(団体)

★ 資料の内容的側面と物理的側面

- ◆ 現在の目録は、物理的側面が記述の根拠
= コンテンツとキャリアは不可分
- ◆ 様々な<版>・・・内容の違い、キャリアの違い



- ・確固とした物理性が揺らいできた現実、どう対応するか？
- ・利用者は本当は何を求めているのか？

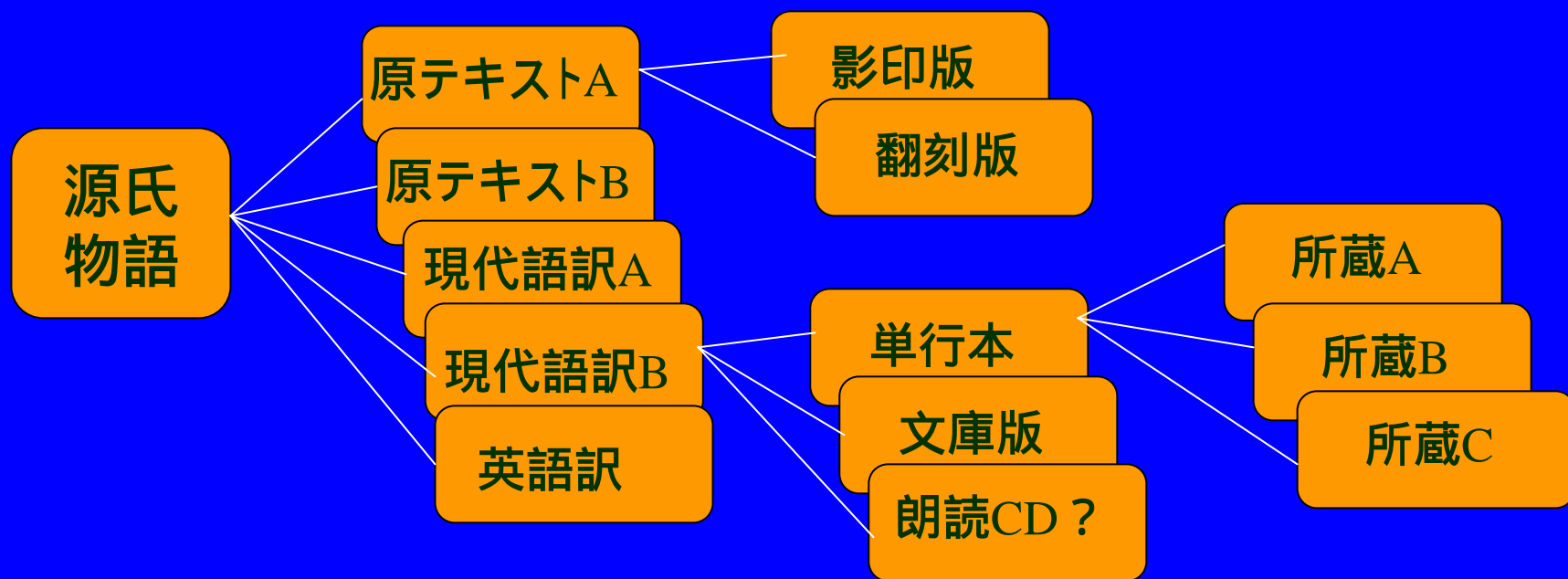
★ FRBRの4実体

著作
(Work)

表現形
(Expression)

体現形
(Manifestation)

個別資料
(Item)



知的・芸術的創造物の単位

文字・音声等で表現された単位

キャリアが具体化された単位

個別の一点一点

- ◆ 特に、「表現形」の設定がキー
表現形主体の書誌レコードの可能性
検索結果表示のクラスタリング

★ 典拠レコードへの拡張

- ◆ FRAR (典拠レコードの機能要件)
2005草案発表 FRANARより
名前典拠を扱う
- ◆ FRSAR (主題典拠レコードの機能要件)
現在検討中

詳細省略

Ref. 渡邊「典拠コントロールの現在:FRARとLCSHの動向」
『情報の科学と技術』56(3), 2006. pp.108-113

目次

0 . はじめに

1 . 目録の将来像

1 . 1 . 目録への危機認識と模索

1 . 2 . 目録「再生」へ向けて - いくつかの論点

2 . 目録規則の将来

2 . 1 . FRBR - モデリングから実用へ

2 . 2 . **新しい国際目録原則**

2 . 3 . AACRからRDAへ

3 . おわりに

★「国際目録原則」

International Cataloguing Principles

◆ パリ原則に代わる目録の基本原則を (IFLA)

◆ パリ原則 (Paris Principles)

1961 ICCP (目録法原則国際会議)

標目の選択と形式についての国際合意

目録の機能 (識別と集中)

著者基本記入方式

基本記入標目の選定 (個人著者、団体、書名)

副出標目の選定

個人標目・団体標目の形式

* 主題標目、書誌記述は範囲外

★「国際目録原則」

◆ 新しい国際原則を

- ・OPAC時代にあわせる
- ・守備範囲の拡張
- ・FRBRの取り入れ

◆ IME-ICC (国際目録規則のための専門家会議)

大陸ごと開催

2003 フランクフルト

2004 ブエノスアイレス

2005 カイロ

2006 ソウル (8/16～18)

2007 ダーバン(南アフリカ)

2008 完成予定

IME-ICC4 (Seoul)

<http://www.nl.go.kr/icc/icc/main.php>

★「国際目録原則覚書」

Statement of International Cataloguing Principles

◆ 構成

適用範囲

実体、属性、関連

*FRBRそのまま

目録の機能

*FRBRのユーザタスクを主体に

書誌記述

*きわめて簡略

アクセスポイント

*パリ原則を継承しながら非基本記入方式にも対応

典拠レコード

*簡略

探索能力の基盤

*「不可欠」「付加的」なアクセスポイント

付録：目録規則作成の目的

◆ パリ原則と比べて...

柔軟性・拡張性はあるが、明快な規範性は薄まっている

カード目録時代とは違った難しさ

著者基本記入制は前面から退いたが、考え方は残存

目次

0 . はじめに

1 . 目録の将来像

1 . 1 . 目録への危機認識と模索

1 . 2 . 目録「再生」へ向けて - いくつかの論点

2 . 目録規則の将来

2 . 1 . FRBR - モデリングから実用へ

2 . 2 . 新しい国際目録原則

2 . 3 . AACRからRDAへ

3 . おわりに

★ AACRの全面改訂へ

◆ なぜ全面改訂か？

対象資料の変化

キャリアとコンテンツの問題

資料区分(GMD)の行き詰まり

章単位での解決は不可能

情報組織化環境の変化

記述だけではOPAC対応にならない

アクセスポイントの見直し

規則の全体構造に関わる

◆ 現段階では

タイトル: RDA (Resource Description and Access)

刊行目標: 2008年

JSC (Joint Steering Committee for Revision of AACR)

<http://www.collectionscanada.ca/jsc/>

★ 「AACR3」改訂作業 - 紆余曲折

- ・2002年からJSCで作業開始
当初は、仮称「AACR3」 2006刊行という話も
- ・2004年末にAACR3第 部草案(3部構成)
関係団体にのみ公開 さまざまな批判
- ・2005.4のJSC会議
原案撤回し、作り直し
改題(Working title)
RDA: Resource Description and Access
- ・2005年末～ RDA第 部草案(3部構成)
一般公開 これにもさまざまな批判
- ・2006.5会議で3部構成撤回、2部(Pt. A,B)に
現在、Pt.Aの相当部分が公開。Pt.Bは年末の予定

★ RDAのめざすもの

- ◆ 「デジタル世界のためにデザインされた、資源記述とアクセスの新しい標準」
 - ・Webベースで規則を提供
 - ・デジタル資源を含む、あらゆる資源を記述可能
 - ・作られたレコードがデジタル環境で利用可能
- ◆ 「目標 (Goal)」
 - ・あらゆる種類のリソースに対応
 - ・国際的に確立された原則や標準に対応
 - ・必要に応じて図書館以外のコミュニティでも使用可能
 - ・英語の慣習を基礎としながら国際的に使用可能
 - ・データを格納・操作するシステム等から独立
 - ・AACR2や既存の目録との互換性
 - ・使いやすさと十分性

★ RDAの特徴(現在明らかな範囲で)

- ◆ FRBRを強く意識して取り入れ
ただし、レコード作成の基本は「体現形」
- ◆ 「資料区分」による枠組みを廃止
要素別の章節立て
- ◆ コンテンツとキャリアを分離する意識
“Carrier description”と”Content description”
- ◆ 意味論と構文論を分離
原則的にシンタックス(プレゼンテーション)は扱わない
「区切り記号」も廃止
- ◆ 著者基本記入制を基本的に維持
“Primary Access Point”
- ◆ 典拠コントロール、典拠レコードを位置づけ

★ RDAの章構成 (2006.9現在)

General Introduction

Part A. Description (書誌記述)

Chap. 1. General guidelines on resource description

Chap. 2. Identification of the resource

Chap. 3. Carrier description

Chap. 4. Content description

Chap. 5. Information on terms of availability, etc.

Chap. 6. Related resources

Chap. 7. Persons, families, and corporate bodies associated with a resource

Part B. Access Point Control (典拠コントロール)

Chap. 8. General guidelines on access point control

Chap. 9. Access points for persons

Chap. 10. Access points for families

Chap. 11. Access points for corporate bodies

Chap. 12. Access points for places

Chap. 13. Access points for works

Chap. 14. Other information used in access point control

Appendix

★ RDA草案 Part A. Description

Chap. 1. General guidelines on resource description

一般的事項(14p)

Chap. 2. Identification of the resource

タイトル、責任表示、版、順序表示、出版など12要素(100p)

Chap. 3. Carrier description

キャリアタイプ、数量、大きさ、システム要件など22要素(65p)

Chap. 4. Content description

内容タイプ、言語、対象利用者、要約、賞情報など18要素(31p)

Chap. 5. Information on terms of availability, etc.

利用条件、アクセス制限など6要素(未完成)

Chap. 6. Related resources

書誌レコード間の関係情報(41p)

Chap. 7. Persons, families, and corporate bodies associated with a resource

Primary Access point, Additional Access Pointの選定(72p)

★ FRBRとRDA

用語(特に実体)

Work, Expression, Manifestation, Item...

ユーザタスクと項目立て(Pt. A)

Chap. 2 Identification of the resource	Identify
Chap. 3 Carrier description	Select
Chap. 4 Content description	Select
Chap. 5 Inf. on terms of availability...	Obtain

Relationshipの明確化

「表現形レベルの記述」は見送り

Format Variation Working Group で検討したが...

★ キャリアとコンテンツ: 資料区分の扱い

紆余曲折の末に今の構造に

Ref. 古川肇「未来の記述規則 - AACR3第 部案からRDA第 部案へ」
『資料組織化研究』52, 2006.6. pp.1-16

Chap. 2 Identification of the resource

基本事項

Chap. 3 Carrier description

キャリア

Chap. 4 Content description

コンテンツ

要素別の章節立て

要素ごとに、すべての資料に対する規定を集中
2章に集中し、キャリア / コンテンツ分離はやや曖昧

★ 記述要素の設定

「エリア(事項)」はなくなり、各要素並列

現行規則の注記も含めて組み直し

2.3 Title

2.3.1. Title proper

2.3.2. Parallel title

2.3.3. Other title information

2.3.4. Variant title

2.3.5. Earlier/Later title

2.3.6. Key title

2.3.7. Devised title

2.3.8. Notes on titles

★ 刊行形態の考え方

「継続資料」の枠組みは廃止

1.1.2. Mode of issuance

記述の各条項で、次の区分のリソースごとに扱いを変える場合がある

- ・ Resource issued as a single unit
- ・ Resource issued in two or more parts simultaneously
- ・ **Resource issued in successive parts**
- ・ Integrating resource

「継続多巻資料」 逐次刊行物 + 継続モノグラフ
実際には、Serial限定規定も多い

★ 意味と構文の分離

「プレゼンテーション」は規定しない
要素の順序を定めず
区切り記号も定めず

Appendix D. Presentation of descriptive data
方法の一つとして「ISBD Presentation」
その他、「OPAC displays」も作られる予定

目次

0 . はじめに

1 . 目録の将来像

1 . 1 . 目録への危機認識と模索

1 . 2 . 目録「再生」へ向けて - いくつかの論点

2 . 目録規則の将来

2 . 1 . FRBR - モデリングから実用へ

2 . 2 . 新しい国際目録原則

2 . 3 . AACRからRDAへ

3 . おわりに